

人の行為を軸とした建築環境の評価に関する研究

正会員 小林 茂雄 君

環境要因が人の行為に与える影響について、建築環境分野では光環境・音環境・空気環境・温熱環境による人体の生理的反応や人間の心理的反応に関する研究が行われてきた。そこでは、形容詞などの言葉で評価することが主体となっているが、感覚を言葉で表すことは非常に難しいことでもある。一方、建築計画分野では、行動科学的アプローチによる建築空間内外の人の行為が空間設計に生かされてきた。

本研究は、環境要因（主に光環境、付随して音環境、空気環境、空間性状）および対人的要因が人の行為に与える影響を観察調査と評価実験により明らかにし、場所に適した行為の促進や不適な行為の抑制につながる環境計画について提案している。屋内外の空間でなされる行為を軸として捉え、行為のしやすさに基づいて環境要因を評価し、得られた結果を、特定の行為を促したり、抑制したりするような環境計画へと結びつけようとしている。すなわち、建築計画分野で取り上げられていたような、日常的な人の行為を環境工学的な要因と結びつけて明らかにしようとしたところに本研究の特徴がある。また、人との会話などの対人行為や、他者に対する不安、公共空間での迷惑行為など、これまで建築分野においてあまり着目されなかった行為を積極的に取り上げている点も特徴的である。

全体は、第1章「研究の目的と構成」、第2章「室内の環境要因が行為に与える影響」、第3章「屋外公共でとられる行為に与える環境要因」、第4章「対人的な安心感を得るための屋外光環境の条件」、第5章「本研究の意義」で構成されている。

第2章では、屋内空間での行為を対象として、行為に意識的に与える環境の影響と、無意識的に与える影響を取り出している。個人的な行為だけでなく、他者と会話するような対人的な行為を取り上げ、活発な会話を表す指標として、姿勢や声の大きさ、視線の合わせ方などに着目して検討している。第3章では、屋外空間での行為を対象としている。特に街路や広場などの公共空間において、街の活性化につながる行為を取り上げ、行為の観察と被験者による評価実験により、その行為を促す環境要因を把握している。第4章では、夜間の屋外空間における行為に関して、安心感が得られる光環境の条件を検討している。街路上で他者への不安が起こる条件を調べ、人の気配が感じられて安心できる要素を取り入れた光環境を提案し、その効果を検証している。

一連の研究として、1990年代後半から2009年までの10年余の間に、人の行為と空間との環境工学的関係性に関する38編の論文が日本建築学会論文集に発表されている。これらは、人間の様々な場面での行為を中心軸として、特に光環境と音環境の面で、環境工学と建築計画との結び付きを体系的に示したものであり、極めて高く評価される。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。